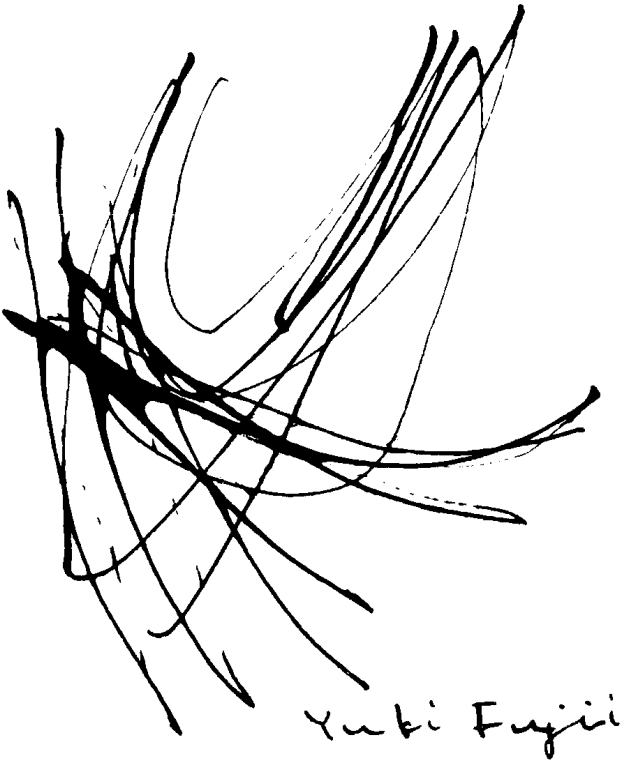
落日の戦場

伊藤桂一



落日の戦場

著者の了
解により
検印省略

昭和40年3月1日　第1刷発行

〒340

著　者　伊藤桂一

発行者　野間省一

印刷所　株式会社常磐印刷所
（藤沢製本）

発行所　東京都文京区音羽町3ノ19　株式会社講談社
電話東京（942）大代表 1111
振替東京 3930

© KEIICHI ITO 1965 PRINTED IN JAPAN
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目次

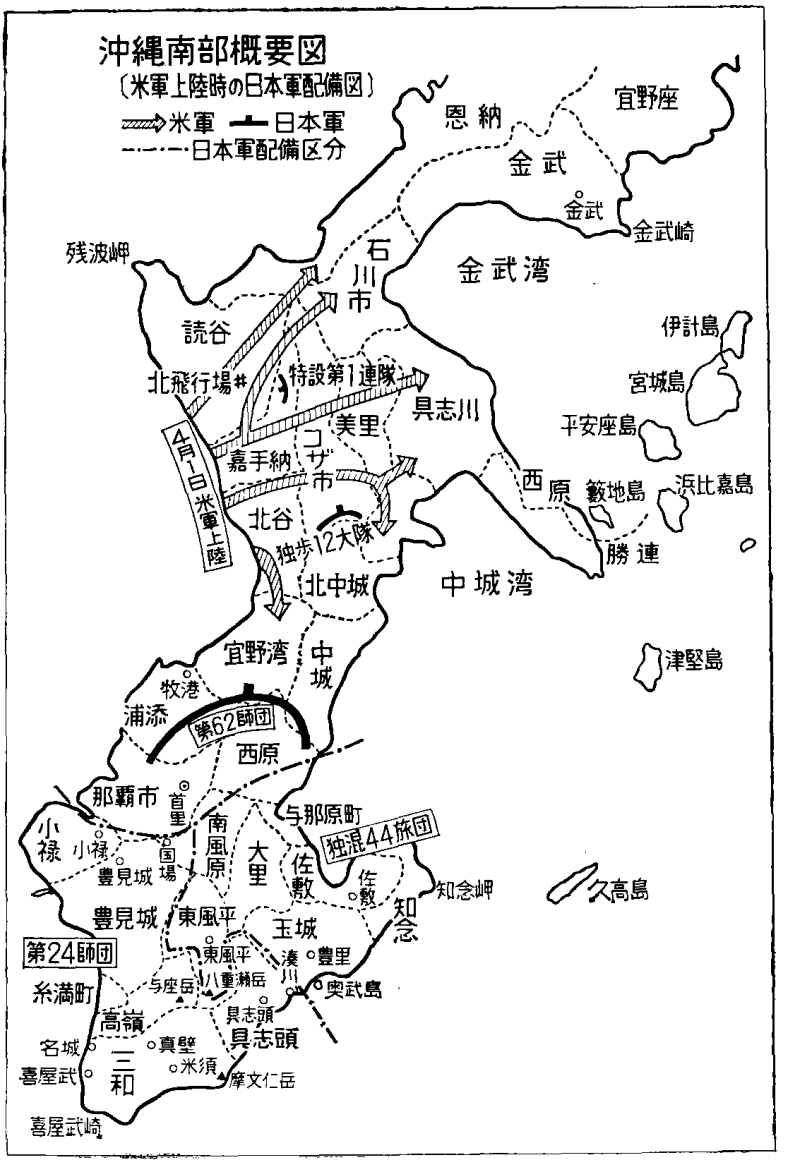
盲点の中　三
母なる墓地　二三
月下の晩餐　四九
草の露　七七
断崖　一〇九
白い海鳥　一四三
生命の宴　一六三
あとがき　二一〇

長編
小説

落日の戦場

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

盲点の中


沖縄南部概要図
〔米軍上陸時の日本軍配備図〕
米軍
日本軍
日本軍配備区分
恩納
宜野座
金武
金武
金武崎
金武湾
残波岬
石川市
読谷
伊計島
宮城島
北飛行場
特設第1連隊
具志川
平安座島
美里
コザ市
嘉手納
4月1日米軍上陸
西原
籔地島
浜比嘉島
北谷
独歩12大隊
勝連
北中城
中城湾
宜野湾
中城
津堅島
牧港
浦添
第62師団
西原
那覇市
首里
与那原町
小禄
小禄
国場
南風原
大里
独混44旅団
豊見城
佐敷
佐敷
知念岬
久高島
豊見城
東風平
玉城
知念
第24師団
東風平
湊川
豊里
糸満町
与座岳
八重瀬岳
奥武島
具志頭
高嶺
具志頭
名城
真壁
三和
喜屋武
米須
摩文仁岳
喜屋武崎

糸満(イトマン)より南の地区には、部落ごとに井戸は一つしかなかった。それも、爆撃によって、埋められていなければ――である。

庄村は、陣地をあとに、後方の部落へ、水を求めに出てきていた。暗かった。(暗いな。冥途のようだな)と思った。傾斜を、虫のようにゆっくりと這いのぼった。自分というものはいったん死んでしまっていて、なにか別なものが、こうして執念ぶかく死にきれずにいるような気がするのだ。

傾斜をのぼりつめたとき、ふしぎに、どこもかも砲声が絶えていた。こういう時もあるのか。声をあげて叫びたいような、深い沈黙だけが満ちわたっている。だが、それもつかのまで、それから、森や丘陵を隔てた東の方向で、稲妻の降りそそぐような砲火がみえはじめた。妙に美しかった。また、地軸がとどろきはじめる。

庄村は、自分のぶんも入れて、水筒を七つ提げていた。七人、生き残っているからである。もっと

も、そのうちのひとつのいのちは、今夜じゅうはもたないかもしれなかった。
庄村の耳の奥で、しきりに水をせがんでいる声がある。下腹に貫通銃創を受けている同僚の酒野の声だ。酒野は、水をせがむうわごとばかりをいいつづけたかと思うと、ふいに気力をとりもどしてくる。
「みんな、がんばってるだろうな。おれだって、まだ参りゃせんよ」
苦しげであることは当然だが、その表情は、なお笑いをうかべようとつとめているようだ。だが、いずれは終ってゆくだろう。彼の眼には光がない。生きている者だけがもっている、あの光が絶えている。
なん度目かのうわごとをくりかえす酒野をなだめてから、庄村は、みんなの水筒をあつめて、ひとりで陣地を出てきたのだ。陣地——といっても、たんに身を隠しているにすぎない墓穴である。手伝いはことわった。敵の所定の砲撃はやんだようだし、危険を犯すのに、わざわざ道づれを誘う必要はなかった。砲撃のつづいているあいだ、庄村はひとり墓穴を出て、後方の、夜目ながら猛烈に土煙を噴きあげている、砲火の落下地点を目測しておいた。その地点に、井戸があるはずであった。しかし、庄村が墓穴にもどったあとも、砲撃はまだつづいていた。後方千メートルぐらいの、丘陵の一角が集中砲火を浴びているのだ。砲火に映えた地肌が、不気味に虚空に照らし出され、燃えつづけているだろう。見馴れた光景だから、なんの感動もなく、砲声のやむときを待った。夜っぴて撃ちつづけるかと思ったが、まもなくやんだ。
「分隊長。出かけますよ」
と闇の一方に声をかけたら
「用心せいよ。わかっとるな」

と、岩川伍長が答えてきた。声には重い弾力があり、庄村は元気づけられるのを覚えた。それから、よろめきながら、丘陵をのぼり、くだりしてきたのだ。いたるところ陥し穴のように、砲弾の炸裂した跡がある。五十サンチの艦砲射撃を浴びると、小さな丘陵はみるまに形を変えて、別な地形を形成した。

庄村は酒野に対して、ひそかに負い目をかんじていた。酒野を、自分より先に死なせたくなかったのである。本来ならば酒野よりも、自分が先に負傷すべきであったのだ、と思った。なぜあのとき酒野は、自分をおいて先に飛び出していったのだろうか？　庄村には、その暗い疑問が解けないでいる。

一昨日の夕刻のことである。かれらの分隊は、糸満の北、部落を背にした、海岸線沿いの台地の一角に布陣していた。布陣していた、というときこえはいいが、正確には、乾いた地肌にしがみついて潜伏していたのだ。庄村は酒野と一緒に、最前部の崩れた土塁の蔭で、息をつめ、待機していた。上空を敵機が旋回していた。かれらは機影におびえていたのではなく、敵機が投下する物資を狙っていたのである。

そのとき、敵の最前線との距離は五百メートルしかなかった。敵機はごく低空で、自軍の位置に物資を投下してゆくのだが、梱包は落下傘に吊られている。落下傘は風に煽られたり、投下の際のはずみで、どうかするとこちらの陣地近くまで来て落ちることがある。それを狙ってかすめとるのである。もちろん姿をみせると、機銃の一斉射撃を浴びねばならなかったが、敵の物資を奪わぬかぎり、補給はまったく絶えていたのだ。補給どころか、かれらは友軍から孤絶していたのだ。

投下物資は、落下傘の色によって区分されていた。青が食糧、赤が弾薬である。青い落下傘は、飢渇に悩みつづけている眼には、生死を忘れさせる魅惑で、空に咲いたのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「黒んぼの奴は、なかなか働き者だったな。蟻みたいに働きやがる」
酒野がいった。数日前、海岸に舟艇で物資の陸揚げをやっているのを、遠目にみたときの記憶をいっているのである。物資運搬の黒人兵の、陽に黒い背をさらした列が、いつまでもつづくのを、かれらは羨望しつつ見ていたのだ。敵の物量は、無際限に運び込まれてくるようだった。
「くるぞ。青い奴が」
ふいに、酒野は叫び、身構える姿勢になった。直線に下降しつつ投下されてきた青い落下傘は、なめに空を切って、こちらへ流れてくる。眼の錯覚で、たいがいはよほど離れて落ちるが、そのときはあきらかに近づいてきた。
「おれが先に出る。待ってろ」
と、庄村はいった。短時日のあいだだが、おそろしく充実した戦闘経験のおかげで、かれらは相互に、つとめて損傷を受けまいとする、自衛の知恵が働いていた。全身に身ぶるいの出る緊張のまま、庄村は数瞬を待った。青い落下傘を曳いて、梱包は前方百メートル弱の地点に落ち、傾斜を少しすべって、とまった。ところが、庄村がはね出ようとして、身を乗り出したまま一瞬をひるんだ隙に、酒野が前方へ駈け出ていたのである。青い落下傘は、敵のしかけた罠のように思えた。それほどみごとに、とび出した酒野を包み込んで、すさまじい掃射がきた。敵兵にとっては、それはあるいは遊びであったのかもわからない。その弾幕に足をさらわれ、酒野はのめり込み、動かなくなった。
——そのときの記憶が、庄村のなかで、重く淀んでいるのである。庄村は物陰をはね出ようとしたときに、本能的に立ちすくまざるを得なかったのだ。周辺を殷々たる砲声にとざされながらも、ある緊迫した静かさを、前面の気配のなかに読みとったのだ。庄村が酒野に「おれが先に出る」といったのは、このところ酒野にどこかあやうげな影がみえ、それをいたわったにほかならなかった。そこに

は、危険に際しては、つねに生命力の充実した者が率先する、という兵隊相互の暗黙の諒解があったからだ。庄村にはだから、敵からの狙撃の意志を、自身の皮膚に鋭敏にかんじとれた。しかし酒野にはそれがなかった。かれは自身の任務を考えるだけがせい一ぱいで、一秒後にくる弾幕を見分け得なかった。それとも、それがわかっていて、はね出たのだろうか？　少なくも二人のうちだれかが、その弾幕に向けて直進しなければならなかったのだ。微妙の間のできごとであり、今となってはむなしいことだが、それはやはり、暗い疑問である。

庄村も酒野も、ともに四年、軍隊の飯を食って来ている。階級も同じ上等兵だが、用心深い性格の庄村からみると、酒野には熱気にとりつかれやすい気質がある。どっちみち酒野に、ああなる運命がめぐって来ていたのだとしても、も少し配慮してやれば、まだ元気でいられたのではないか。ひとこと「出るな。やられるぞ」というべきであった。——という悔恨が、やはり庄村には拭いきれずつきまとってくるのである。

「あいつなにか、おれに恩にきてることでもあったんかしれんな」

気をゆるめると、のめり込みそうになる疲労に耐えながら、庄村はそんなことを考えながら歩いた。長い軍務の中だったし、気づかぬままになにかがあったかしれない。お互いがそんなふうにして、いわず語らずにつながりあっているのが兵隊の生活であった。庄村は、わびしい充足を覚えた。それからあとは、また耳の奥で、酒野の、水をせがむ声だけがきこえてくる。敵味方の砲声も耳に入らなかった。

人間は酷烈な状況下におかれると、水の位置を嗅ぎわける、動物的な本能がよみがえってくるものらしかった。庄村にしても、砲弾の落下点は目測したが、後方の地形にくわしいわけではない。ただ、この方向にまもなく部落をみるだろう、そこに井戸があるだろう、そこらは屋根も柱も周囲の樹

木も砲撃で吹っ飛び、まるで廃墟でしかないだろうが、とにかく井戸はある、というその光景が、ありありと描かれてくるだけだ。それは幻覚ではない。井戸がなければならない、と信じきっているのだ。

ぐるりが急に明るくなり、そのあたりの空に、照明弾がいくつもあがった。白銀の箭が宙にくるめき、異様な明るさで夜の一角が照らし出されてくる。平常でも樹木の乏しかった西海岸の丘陵地帯は、砲撃でどこもかも掘っくり返されて、土の山ばかりの醜い風景になり果ててしまっている。陣地から三百メートル以上は来たと思うが、まだ部落の気配はなかった。照明弾を合図として、進行方向の丘陵へ向けて、また砲撃がはじまりだした。なぜこれほど撃たなければならないのか。そのうち、どういうわけか、一弾だけが、案外な近さに落ちて炸裂した。

庄村は傾斜に身を伏せた。砲撃の気配を読むためよりも、ひと息、身体をやすませるつもりだったのだ。喘ぎながら、土の香を嗅いでいた。そのまま、眠ってしまいたい気がふとした。するとそのとき、別な声が、庄村の耳によみがえって来たのである。

「戦争ってのは、少し滑稽なとこもあるもんだな、分隊長」

陣地――あの墓穴の奥で、尾田兵長が、岩川伍長に話しかけるのを、きいたときの記憶である。庄村はいま、後方の集中砲火に向って進んでいる。考えてみると、これは滑稽なことではないだろうか。戦線は、いわば、かれら一個の分隊を残して、とっくに後方に移っているのである。その実感が、庄村に、尾田の言葉を思い起させたのにちがいない。

戦線の錯綜しているためもあるが、かれらの一個分隊は、あきらかに周囲から孤立して、前に出すぎているのである。かれらは自ら意志して、その道を選んできている。傾斜の蔭の墓穴にもぐり、凹地の繁みに匍いつくばりして、分隊は分隊独自の生き方を守ってきたのである。そこにはかれらの知

恵のすべてが賭けられていたといえる。そうしてそれをおかしがるだけの余裕が、尾田や岩川には残っていたのだろう。酒野がやられたときも、まちがいなく、敵は正面五百メートルの圏内にいたのだ。日没前に戦車が数輌攻めてきた。戦車はかれらの分隊を黙殺して進み、砲火のさかんな応酬が、後方の丘陵の奥でひとしきりきこえたが、暗くなるとまた元の地点へ引き返していった。しかし、敵の前線が進出してくる気配はあった。分隊は、その間隙を縫って酒野を収容し、爾来、あやうい撤退をここまで重ねてきている。このあたりの墓所は、大きさはまちまちだが、石で囲んだトーチカのようなものが多く、代用陣地や潜伏場所として役立った。まるで、沖縄戦を予想して、こういう墓地造りが行われたみたいではないか——と、これも岩川や尾田が、苦笑まじりに話したことがあるほどである。

ところで、分隊の独自の行動——というのは、五月の末からはじまっている。

岩川伍長の指揮する機関砲一個分隊は、当初、小禄（オロク）、豊見城（トミシロ）を中心に西海岸に展開していた歩兵第二十二連隊に配属されていた。小禄には飛行場があり、わずかばかりの「彗星」が、擬装してかくされていた。これは艦上爆撃機だが、搭載されるべき艦は、とっくに海に沈んでしまっていたのだ。岩川分隊は、前面に湾を隔てて那覇（ナハ）を俯瞰する丘陵上で、陣地構築を急いでいた。付近の部落から、老若男女を問わず島民たちも協力しにきてくれていたし、ともかく、和やかな日々がつづいていたのだ。少なくも、昭和十九年の、十月の九日まではである。

そのころ、眼下にみる海の色と、はるかに臨む那覇の町並の赤い屋根屋根と緑の樹々は、陣地構築に疲れた眼を、どれほどやすませてくれたかもしれなかった。町なかを、花をいっぱいに積んだ馬車がたどってゆく、カタコトという物音さえききとれるようであったのだ。かれらはみな那覇に上陸したから、那覇の町はよく知っていた。珊瑚礁を洗う波と、いちめんの緑に襲われたまぶしいほども鮮

やかな島影におどろきながら、ごくしあわせな予感に燃えて、那覇の土を踏んだのだ。際限もない好意にみちていた住民たち。石だたみの道や、垣根に咲くレイゴの花、ゆきずりにみる黒髪の美しい女たち。——そしてある日、那覇と、那覇を囲む一帯に、ふしぎな魔法がかけられたのである。

その日の未明、那覇の上空は高曇りだった。その雲層のあいだから、機影は、一機ずつ、雲が誕む魔術のように、みごとにすばやく、現われて来たのである。不気味な轟音が上空を満たしはじめたときには、第一波のグラマンの編隊が上空を覆っていた。そうして夕刻までに、那覇の町は地上から消えていた。陣地の下にみえた、対岸へ伸びていた明治橋も海中に没した。「彗星」も擬装のまま燃えてしまった。傷だらけになった陣地を、かれらはまた翌日から構築し直さなければならなかった。

米軍が嘉手納(カデナ)に上陸を開始したのが、翌年の四月一日である。上陸作戦は、徹底的な艦砲射撃と、空爆のあとに行われた。艦砲弾の直撃を受けると、石も土も陣地も一切の資材も兵隊も、バラバラに吹っ飛んで跡も残さなかった。そのときの閃光は、両手を眼にあてて顔を土に埋めていても、ぐるりが白昼のように明るむのがはっきりとみえた。上陸地点では、米軍は予期に反して、ほとんど日本軍の抵抗を受けず、当日六万五千の兵力を揚陸した。翌日からも兵力と、おびただしい物資の揚陸がつづいた。日本軍はなぜ水際で一戦を挑もうとしないのか？　気味のわるい拍子ぬけのままに、米軍の一部は北上、主力は南下をつづけてきた。それでもほとんど抵抗を受けなかった。

米軍主力が、浦添(ウラシエ)と西原を結ぶ線に到達してきたとき、そこではじめて強硬をきわめた抵抗に会った。歩兵部隊の善戦はもとよりだが、四砲陣地の威力が卓越していた。米軍は死傷続出して苦しみ、沖縄攻略の容易ならざる前途を認識せざるを得なかったのだ。爾来米軍は、予想外の出血を強いられながらも、絶対優勢な装備と、制空海権を利して攻撃を続行しつつ、四月二十五日には主力は首里北方に進出してきた。日本軍がこれを迎えて、総反撃に転じたのが五月四日だが、この作戦が失敗し

て、おびただしい犠牲を払った末、その後の戦闘法を、洞窟陣地に分散する、持久戦に頼らざるを得なくなった。ようやく勝機をつかんだ米軍は、全線にわたって浸透作戦を企図し、寸土を争う攻防戦を重ねながらも各地で着々と戦果をあげ、五月二十四日には、遂に首里雨乞森に侵入してきたのである。もはや戦局の帰趨はみえはじめていた。西部戦線では那覇の一部が陥ちている。

第三十二軍司令部が、首里を棄てて撤退を開始したのが、五月二十八日である。小禄周辺陣地も、それにともなって漸次に撤退をつづけることになったのだが、その撤退間、岩川分隊は、歩兵部隊から独立して行動するようになったのだ。これにはわけがあった。

もともと機関砲は、敵の上陸作戦に際しての、対空射撃を任務としている。小禄よりはるか北方の嘉手納に敵が上陸してしまったあとは、空襲機に応戦してゆくほかには、本来の任務は失われてしまっていた。地上戦においては射角に無理があって、軽機関銃はおろか、小銃ほどにも使いものにならない。重機関銃よりも長い銃身を脚に支え、口径二十ミリ、一連射七発ずつ射出す機関砲弾は、正確にいって、襲撃してくる敵機が前さがりの態勢に移ってくるのを狙い撃つときしか、その威力を発揮しない。水平には撃てない。かりに撃ち得たとしても、戦車の前部鋼板はとうてい射抜けない。しかも岩川分隊の機関砲は、砲弾の破片を受けて、弾倉部に故障を生じてしまっていた。いわば無用の兵器となり果てた機関砲を抱いて、地上部隊の戦列から遊離してゆくことになったのである。それに岩川分隊は、軍司令部直轄の機関砲大隊から分割配属されたものであり、歩兵部隊とは気質的になじみもなく、戦況が深刻の度を濃くするにつれて、自然、分隊だけが浮きあがって来たのである。つまり、戦線が分断され、通信も杜絶し、補給もなく、しかも絶対優勢な敵の猛撃下にさらされたとき、かれらだけの活路をもとめて、手段を尽くしてゆくよりほかはなくなったのだ。かれらは分隊長、射手、弾薬手とも、みな小銃も持っていなかった。小銃装備を整えたのは、周辺に戦死者が続出しはじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com